【漢検漢字文化研究奨励賞】優秀賞

言語学・日本語学における文字論

—漢字の位置づけ・分析の問題—

オックスフォード大学アジア中東学部研究助手　**シャルコ　アンナ**

【キーワード】 漢字、文字論、表意文字、表語文字、表音文字、表音的表記、音訳、表意性、当て字、万葉集、外来語、漢字の分析モデル、メタレベル

はじめに

これまでの漢字の文字としての位置づけは「表意文字・表音文字」という枠組みの中で行われてきた。しかし、漢字は、その成立ち・運用上に音と意味、両要素を持っており、その２つの要素が複雑な関係にあるため、表意・表音という２極式の分類に容易に当てはまらない場合が多い。本論文では、複数のレベルからなる漢字の分析モデルを提案し、従来の「表音」・「表意」のアプローチを見直すと共に、「表音的表記における表意性」[1]の位置づけを試みる。

まず、文字論という領域において漢字がどのように捉えられてきたか、漢字の表意的要素と表音的要素の関係に注目して記述する[2]。次に、漢字の分類へのアプローチを概観し、それらの問題点を示したうえで自らの分類モデルを提案する。さらに、「表意・表音」という 2 極の枠組みから外れるため軽視されがちな「表音的表記における漢字の表意性」を要の問題として取り上げ、その位置づけを試みる。最後に漢字の多側面性を重視した漢字の分析モデルを提案する。

1　文字類型研究における漢字の位置づけ

1.1　文字体系の分類の基準について

文字研究においては、世界のあらゆる文字体系をどのように分類するのかが重要な問題の一つであり、これまでに数多くの分類が提案されてきた。それらの分類のほとんどは以下の２つの基準のいずれか、または両方に基づいている。

1) 文字が表す言語単位のレベル

研究者によっては言語単位の設定に多少の相違がみられるが、語・形態素・音節・音

---

[1] 「表音的表記における漢字の表意性」とは、「切死丹」（キリスタン）、「浦潮」（ウラジオストク）、「冷忍（レーニン）」などのように、音訳でありながら、一定の表意性を帯びている例のことである。

[2] 文字類型研究における世界の文字体系の各分類について、Coulmas (1996)、Terry Joyce & Susanne R. Borgwaldt (2013)などが詳しい。

素という４つのレベルに分けることが一般的である。漢字は語または形態素レベルに対応するのに対して、仮名は音節レベル、アルファベットは音素レベルに対応するように区別されることが一般的である[3]。

2)　意味を表す言語単位との対応の有無

それは、すなわち、表意文字と表音文字への区分である。

欧米では、「pleremic（表意味）[4]」と「cenemic（表音）」という用語が広く用いられる。（Haas (1976, 1983)）「pleremic」はギリシア語の「満ちた」に由来し、意味と音、両方とも有する文字体系のタイプを指す。それに対して、「cenemic」 は、ギリシア語の「空っぽ」から来ており、意味を表さず、音声のみ表す文字体系を言う。

両方の基準を用いた分類の例としてCoulmas (1989)による分類があげられる。

Coulmasは文字体系をその文字が対応する言語単位によって、次の４つのレベルに分けている : 語彙素レベル（lexemic level）、形態素レベル（morphemic level）、音節レベル（syllabic level）、音素レベル（phonemic level）である。それらをさらに、表意的要素の有無によって、２つのグループに分ける。語彙レベルと形態素レベルは表意的要素　(meaningful elements)を有する（＝pleremic）のに対して、音節と音素レベルは表意的な要素が含まれていない（＝cenemic）。(“The writing systems of the World”, p. 49)

1.2　表意文字、表語文字、表音文字 －漢字は何文字であるか

このように、これまでの文字の分類が、主として表意・表音という2極式の枠組みにおいてなされてきたが、その枠組みのなかの漢字の位置づけが激しい揺れを見せてきた。

1.2.1　漢字は表意文字か

まず、「漢字は表意文字である」という確信が、西洋人が漢字に出会った16世紀頃から現在に至るまで、漢字に対する最も根強い誤解の一つである[5]。例えば、DeFrancis (2002)は、18世紀の宣教師が残した以下のような記述をあげている。（①②の日本語訳は筆者による）

① “they are composed of symbols and images, and that these symbols and images, not having any sound, can be read in all languages…”

「（漢字は）記号や絵から構成され、これらの記号や絵は、音声を持たないため、どの言語でも読むことができる」(*Mémoires* <...>, 1776, p. 24）

② “images and symbols which speak to the mind through the eyes…”

「目を通して直接心に訴える絵や記号」(*Mémoires*[6] <...>, 1776, p. 282）

---

[3] Haas（1983）は「level of the script」のように「レベル」という用語を用いるが、樺島（1979）は、音素は１階、拍は２階、音節は３階、語は４階という具合に「階」という用語を採用している。

[4] 筆者による直訳。

[5] 「漢字は表意文字である」という思想が生まれた背景について De Francis (1984), Unger (1990)が詳しい。

[6] *Mémoires concernant l'histoire, les sciences, les arts, les moeurs, les usages, &c des Chinois, par les missionaries de Pekin, Paris, 1776*。

少し時代が下って、1899年に“The History of the Alphabet”という進化論の思想の観点からアルファベットの歴史をまとめた研究書が刊行された。著者のTaylorは、世界の文字をイデオグラム（表意文字）とフォノグラム（表音文字）に大別し、文字は表意文字から表音文字へと進化すると唱えた[7]。(p. 5)　漢字については、表意文字という原始的な段階に留まっているという差別的な位置づけを行っている。Taylorの言う表意文字も音と関係なく物や概念を直接表すタイプである。(“The History of the Alphabet” v.1, p. 25)

20世紀に入っても、漢字は音声言語を媒介せず直接概念・意味を伝えるという見方がなお続いた。例えば、Saussureのような言語学の巨人でも、世界の文字体系を表意的文字体系と表音的文字体系に分けて、中国の漢字を典型的な表意文字としてあげている。（Harris (1995), p. 57）

1.2.2　漢字は表語文字か

それに対して、Gelb (1952)は、表意文字が表すのは音声言語を媒介しない「概念」ではなく、ある言語の「語」であるため、「表意」よりは「表語」の方がより適切な用語であると指摘している[8]。(Gelb “A study of writing”, p. 13、Bloomfield “Language”, p. 285）

これを受けて、「表意」という用語は、一般人の間では使われ続けたが、言語学界では大多数の研究者が「表意」を避け、「表語」や「形態素」を採用した[9]。研究者によっては、漢字が広い意味では表語文字であることを認めつつ、中国語の場合は漢字一文字が語よりは形態素を表し、また中国語の形態素の長さは音節に相当するため、「表形態素」「表音節」といった用語の方が相応しいとしている[10]。例えば、 Rogers (2005)はmorphographic（表形態素文字）、Daniels (1996)は logosyllabary（表語音節文字）という用語を使用している[11]。

森賀（2018）は、「語」という用語は科学性・厳密さを欠くため避けられる場合が多いと指摘し、「形態素」についても「一字が一形態素に対応するとは限らない」と述べている。また、「漢字について「意味的最小形態」などと言い出すと、偏旁や部首なども意味を持つので、字の内部構造にまで立ち入ってしまうことになる」などと述べ、「表語文字」「形態素文字」いずれも漢字を説明する用語として不十分であるとしている。（「漢字の本質」p. 10）

1.2.3　漢字は表音文字か

---

[7] Gelb (1952)や Diringer (1962)もこの進化論の思想の影響を受け、アルファベットを最も優れた文字として位置づけている。

[8] なお、Gelbは、漢字のみならず、2 (two, second)、$ (dollar)、° (degree)といった一般的に表意文字（または記号）とされる例も表語文字（logogram）として位置づけている。(p. 249)

[9] 森賀（2018）はさらに、記号論の視座から「表意」という用語の問題点を指摘している。「「表意」を文字通り「意味を表す」とのみ解釈すれば、シニフィアン（signifiant）である以上、いかなる文字もシニフィエ（signifie）である意味を表さないはずはないから、これは一種の重複表現である」（pp. 8-9）

[10] 古代中国語では語＝形態素＝音節という関係が一般的であったが、時代と共に多音節語への傾向が強まり、現代中国語では語＝2 音節以上の場合が少なくない。形態素に関しても多音節からなる例がある。例えば、秋千 qiūqiān（ブランコ）、蜘蛛 zhīzhū（クモ）、巧克力 qiǎokèlì（チョコレート）などがある。

[11] 「表語」という用語とそのバリエーションに関しては Handel (2015) pp. 114-115 が詳しい。

DeFrancis (1984, 1989, 2002)は、文字の類型としての「表意」「表語」両方とも否定し、全ての完全な文字体系[12]が表音的であると唱えた。文字の言語単位との対応に関しても、全ての文字体系は音素か音節を表しているとしている。なお、文字体系によっては、二次的な特徴として、表意的な要素を有する文字体系もあるとし、以下のような分類を提案している。

表１　DeFrancis (1989) による文字体系の分類

	“Pure”（音のみを表す）	“Meaning-plus-sound”（意味＋音）
Syllabic system（音節文字）	Japanese, Yi	Sumerian, Chinese, Mayan
Consonantal system（子音文字）	Phoenician, Hebrew, Arabic	Egyptian
Alphabetic system（アルファベット）	Greek, Latin	Korean, English

出典：“Visible speech: the diverse oneness of writing systems”, p. 19 の内容に基づいて筆者作成

「全ての文字体系が表音的である」という DeFrancis による極端な訴えが一部の研究者から反論を招いた。例えば、Hansell (2002)は、DeFrancis (1989)は世界の文字体系を音節文字と音素文字に区別するが、日本の漢字の場合は、漢字１文字で１音節以上の単位が表記可能であると指摘している（p. 170）。また、訓読み・国字・熟字訓などを例にあげて日本語における漢字は、音声言語との結びつきが弱く、表語性が高いことを示している。

さらに、カイザー（1995）が指摘しているように、「中国の文字体系と比べて，全体としての日本の文字体系は「世界の文字」の中で従来あまり注目されず，文字学ではむしろ漢字から発達した仮名文字に興味が集中した」[13]。DeFranicis の分類はこうした事態を反映しているといえる。

DeFrancis が中国の文字と英語の文字を「意味＋音」という同じグループに分類していることも、Handel (2015), Sproat (2000)などに批判的に受け止められたが、この議論については 1.4 において詳しく述べる。

1.3　漢字の用法・機能に注目したアプローチ

ここまで見てきたように文字類型研究における漢字の位置づけは、表意文字→表語文字→表音文字のように、極端な変化を経てきた。その背景には、日中における漢字の用法の相違や漢字の音声言語との対応の特徴､表音的要素と表意的要素の複雑な関係などがあり、従来のアプローチによる分類は容易に当てはまらない場合が多い。

以下に、漢字の文字記号としての性質ではなくて、実際の使用における用法・機能に注目したアプローチをいくつか紹介する。

[12] DeFransis は完全な文字体系と不完全な文字体系という区別を行っている。不完全な文字体系は個別な記号からなり、限られた数の概念しか表せないが、完全な文字体系は音声言語で表現可能なあらゆる概念が表記できる。(“Visible language”, 1989, p. 3)

[13] カイザー シュテファン（1995）「世界の文字・中国の文字・日本の文字　漢字の位置付け再考」『世界の日本語教育：日本語教育論集』5, p. 155。

河野（1980）は文字をまず言語を記録する記号として捉え、「文字の根本的な言語的機能は究極には表語ということにある」と主張している（『河野六郎著作集3』p.5）。ただし、文字体系によって表語の方法が異なるとしている。表音文字の場合は、「表語単位の文字は失われたが、単位は表音要素にいわば拡散された。そしてその表音要素の結合が一つの表語単位をなすことになったのである。スペリングがそれである」としている（『文字論』p. 122）。それに対して、漢字の場合は、「表語は表意と表音の二つの仕方で果たされる。所謂指事・象形・会意の文字は表意による表語文字であり、諧聲文字は表音による表語文字である」としている。（『文字論』p. 34　※下線は筆者による、以下同様）

つまり、表意・表音を表語の方法として捉えており、漢字を成り立ちによって表意（象形・指事・会意）と表音（形声）とに分けている。また、「諧聲聲符はこの様に造字の際にその表音性を発揮するが、又外國字音の場合にもその表音的機能が現れることがある」と述べ、形声文字の表音性が造字の段階と外来語を表記する際に活用されると示している。

犬飼（2002）も、以下のような考察をしながら、実際の使用における文字の多機能性を認めている。

③ 表語文字と表音文字の機能をよくみると重なるところがある。たとえば日本語の仮名の「を」を現代語では格助詞「を」に専用であるから、機能だけをみれば表語文字である。また、漢字の「亜米利加」のような使い方は、機能だけをみれば表音文字である。（p. 4）

Haas (1983)においても、英語の文字表記を対象に同様な見解が述べられている。Haasによると、１文字が表す言語単位は１つ以上のレベルに属する場合がある。例えば、*“a book”* という英語のフレーズにおける*a* は音素でありながら、音節を成し、形態素でもあり、語として扱うことも可能である。（“Determining the level of script”, p. 17）

漢字の表音的機能については、河野は「表音性の発揮・表音的機能」という表現を用い、犬飼（2002）は「意味をあらわす面が後退する用法」と述べている。犬飼はさらに、「卑弥呼」を例に音訳表記について次のように記述している。

④ ヒミコのような日本語の発音を書きあらわしたもので、それぞれの字の意味は切り捨てられている。＜中略＞しかし、これも、たとえば現代日本の落書きで「よろしく」という語をわざわざ「夜露死苦」と書きあらわすようなことが行われがちであるように、ともすれば【義】が復活してくる。（pp. 13-14）

このように、犬飼は漢字も仮名も表音・表語、両方の機能を果たし得る例をあげるほか、漢字は音訳表記の場合でも「字義が復活する」ことが「行われがち」と述べつつ、「こうしたことがあるからと言って、文字の分類には変更が必要ない」としている。（『文字・表記探求法』p. 4）

それに対して Hansell (2002) は、「文字の使用目的・使用文脈を視野から排除した文字（体系）の分析の価値が大いに疑わしい」とし、文字を表意・表音に分けた伝統的な分

類方法への見直しが必要であると訴えた。(p. 175)

文字がどのような動作・目的に使われるかによってその機能が変わってくると主張し、中国語と英語を対象に文字の書く際と読む際の機能に注目している。

Hensell は書く際の機能を次のようにさらに分けている。

a. 新しい語を書く (novel words' writing) → 聞いた／見たことのない新しい単語を文字で綴る

b. 既知の語を書く (orthographic writing) → 正書法に基づいて馴染みのある単語を書く

Hansell によれば、a. 新しい語を書く場合は、文字の表音的な機能（cenemic principles）が活用される。それに対して、b. 馴染みのある語を書く場合は、表意的な機能（pleremic principles）が優先となる。

また、読む際の機能も同様に区別している。

a. 意味を読む (reading for meaning) → 既知の単語を読む（黙読）

b. 音を読む (reading for sound) → 未知の単語を読み上げる

「読む」場合は、動作のタイプと活用される文字機能の関係がより複雑であるが、中国語も英語も、表音的と表意的、両ストラテジーを使っているとしている。(“Functional Answers to Structural Problems in Thinking about Writing”, pp. 142-152)

このように Hansell によれば、「表意 (pleremic)と表音 (cenemic)は、特定の文字体系の本質的な特徴ではなく、どの文字体系においても、読み手・書き手が使用目的・場面に合わせて使うストラテジーにすぎない」[14]。(p. 152)

さらに、読む際と書く際の機能のほか、Hansell は言語接触の際の文字の機能（Interlinguistic function）に注目している。「外来語の表記における文字は、その文字が本来表している音声言語から切り離された、より純粋な形で観察することが可能だ」とし、文字の働きについて考える際、外来語の表記に注目すべきと主張している。(pp. 153-154)

筆者も修士論文[15]において、漢字は表意（または表語）文字とされるのに対してローマ字は表音文字とされているが、実際の使用ではこの分類に当てはまらない例が少なくないと指摘している。

例えば、ローマ字は音素を表すほか、記号のように使われたり（S・M・L の洋服サイズ表示)、語や形態素を表したり（A（ace)、X'mas（X = Christ))、形を表現したり（T シャツ、U ターン）するなど使用状況や文脈によって様々な働きを持っている。

一方で、表意ないし表語文字とされている漢字が形声文字（河、江、銅）をはじめ、和語への当て字の表記（出鱈目、兎に角）や外来語に対する音訳（亜米利加、瓦斯）など表

---

[14] 文字を考察・分析する際に「動作」を視野に入れる必要性について、尾山（2017）においても指摘されている。尾山は、「書き手」と「読み手」とは別に「分析者」という観点を設けている。分析者の読み手との相違について次のように述べている。「分析者は本当に一読み手になりきってしまうわけではなく、理想の読み手となって、かつその読み手の読む行為を何度もシミュレーションし、かつ第三者的観点（分析者に退き戻って）にも立ちつつ、起こりうることを洗い出す。そして時に書き手の視点にも立って、結果、これらを総合に行き来しながら、分析を帰納していく」。(p. 42)

[15] 「現代における漢字とラテン文字の機能に関する一考察　―日本と欧米の一般社会における文字・表記を中心に―」早稲田大学大学院社会科学研究科, 2014。

音の要素を多分に持つ例も多く見られる。また、「大の字に寝る」や「十字路」のように、字義が捨てられ形のみが活用される場合がある。「コーヒー/珈琲/coffee」や「大学/大學」などのように綴りや字体を変えることによって特定のコノテーションが強調されるケースも多々ある。このように、筆者が特定の文字が複数の機能を果たしうるという事実を前提として、「表意」・「表音」を固定した類型としてではなく、機能の差異という次元で捉えるアプローチを提案した。文字機能を「表音」、「表意」、「表形象」、「表ニュアンス」という４つの機能に分けている。

従来のアプローチとの違いを下記の図で簡単にまとめられる。

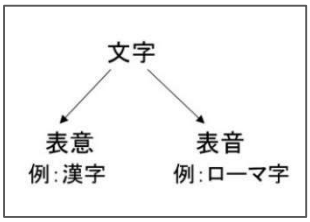

図１ 従来のアプローチ

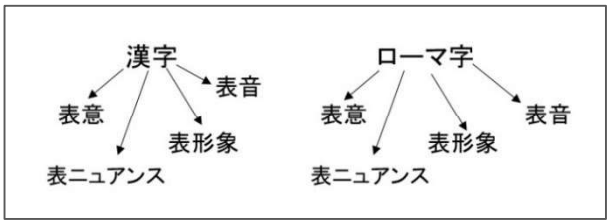

図２ 文字の機能を基準にしたアプローチ（シャルコ，2014）

このように、修士論文では、上記の枠組みを提案し、全ての文字が実際の使用においては複数の機能を果たしうることを証明したが、文字の本来の性質に関わる相違も見られることが新たな課題として浮上した。具体的には、漢字の場合は字義の影響が強いため、表音的に機能する際も意味への配慮がよく見られる（外国の地名・人名など、特に音訳表記に多い）。それに対して、本来表意性を持たないローマ字はその表意性を発揮できるコンテクストが必須の条件であることも明らかになった。

漢字の機能に着眼したもう一つの例として森賀（2018）における考察があげられる。森賀は、構成要素としての漢字も表音・表意、両機能を果たせると指摘している。

⑤　大部分の＜要素＞[16]の機能は固定的なものでなく、他のどの＜要素＞と組み合わせるかによって変化するのである」。「例えば、「骨（コツ）」は「骸（ガイ）」「髄（ズイ）」「髑（ドク）」「髏（ロ）」などでは義符として機能し、「滑（カツ）」「猾（カツ）」「榾（コツ）」「鶻（コツ）」などでは音符として機能している。（p.15）

このように、近年の研究では伝統的な分類法から離れ、実際の使用における文字の働きに注目する試みがいくつか見られるが、各研究者の「機能」の基準が異なっており、「機能」という用語自体の扱いに関しても、共通した定義や使用範囲が定められていな

[16] 森賀（2018）の扱っている＜要素＞という用語は Lyons (1981) の理論に基づく。森賀によると、「ライアンズは「記号の二重性（duality）を、第一の段位の＜単位(unit)＞は第二の段位の＜要素(element)＞から成り立つと表現しているが、その用語を借りれば、文字という記号体系において、音標文字(alphabet)は一字が＜要素＞となり、漢字は一字が＜単位＞になるといえる」。（『漢字の本質』 p. 13）

い。

例えば、河野（1980）は、造字の段階に注目し、漢字の成り立ちによって「表意」「表音」に分けているが、犬飼やHaasは言語単位との対応の場合の機能に焦点をあてている。Hansellは、動作と単語の認知度（馴染みの度合い）によって、文字の機能が変わると認知言語学の観点も絡めて考察を行っている。

こうした不揃いがあるのは、各研究者が異なったレベルでの文字の機能・特徴に注目しているためである。

池上（1984）は、言語を含めて「文化的な対象は「構造」と「機能」という二つの面で捉えることができる」と述べており、両アプローチの共存性を前提としている。

⑥　「構造」と言えば、その対象の成立する仕組みが問題になる。＜…＞「機能」と言えば、その対象の働き、果す役割ということが問題になる。そしてその対象の働きに人間が深く関与するような場合には、「機能」は人間がそれでもって何をするか、という問題になる。（『記号論への招待』p. 193）

本論文では、文字のそうした多側面性を認め、より多くの特徴を把握できるように、複数のレベルに分けて考察することが有意義であると考える。また、書き手・読み手として関与する「人間」にも注目する。それに関しては第3節において詳しく述べる。

1.4　文字体系の比較と単位設定の問題　１文字レベル vs 綴りレベル

文字論における漢字の位置づけ・分類方法を巡って、もう一つ注目すべき問題がある。それは文字体系を比較する際の単位設定である。

特に、漢字がアルファベットと比較される際、漢字１文字対アルファベット１文字だったり、漢字１文字対アルファベットの文字列（綴り）だったりするが、綴りのレベルで見ると、漢字とアルファベットの機能に共通性が見出せる。すなわち、森賀（2018）が指摘しているように、「一字という枠を取り去った上で眺めてみれば、＜…＞（漢字の）文字としての普遍性が浮かび上がってくる」。（p. 12 ※カッコ内は筆者による）

例えば、河野（1994）は、ローマ字に関して、「おのおのの語のスペリングはそれぞれ歴史的運命を荷いつつ、その固有の形を保存する。その有様は漢字の一字一字がそれぞれ固有の歴史的背景を保つのとよく似ている」と述べている。（『文字論』pp. 115-116）

森賀（2018）も次のように論述している。

⑦　「表意文字」ではなかったアルファベットにしても、英語の I, psych-, im-, phil-, mono-, bio-などという文字の連なりは中国語の我、神、不（非）、愛、単、生などという漢字とよく似た概念的意味を喚起するだろうし、英語の knight の k、ドイツ語の名詞の第一字目を大文字で綴ること＜…＞などは、「表音」機能よりむしろ同音語を区別する「表意」機能をはたしている。（p. 12）

このように、DeFrancis（1984, 1989, 2002）が英語の文字体系と中国の文字体系を同じグループに分類しているぐらい、漢字 1 文字対英語のスペリングで比較した場合、英語の表

記にも表意的な働きが十分に見出せるのである。

しかし、漢字 1 文字対アルファベット 1 文字で見た場合、果たしてどちらも表意的だといえるであろうか。

Handel (2015)は、一文字単位で見た場合、漢字はアルファベットとの次のような根本的な相違があるため、区別することが有意義であるとしている。

1) 漢字は形態素・語という意味を有する言語単位と対応している

2) 漢字には部首があって、その部首が各字の大まかな意味範囲を示している

森賀（2018）は、Handel が示した特徴に加えて、漢字の内部構成の特殊性についても指摘している。「＜単位＞を構成するにあたっての＜要素＞の配置法が、左から右などの一方向に直線的に並べる音標文字とは異なり、多様」であるとしている[17]。

上記のような相違を踏まえて、Sproat (2000)は、中国とエジプトのように本物の表語要素（true logographic components）を有するシステムと英語のように偽表語要素（“pseudologographic”）を有するシステムとで区別している。（pp. 82-84）本物と偽物の表語要素の違いは、その要素自体が本来意味を表しているかどうかにある。

Harris (1995) は、英語のスペリングに関して、「表意」「表語」といった用語を避けて、「semiological function（語を識別する機能）を用いている。「英語においては“eight”の“ght”などのように、音声と直接対応していない文字の組み合わせがあり、そのような文字結合が一定のパターンを成し、語を識別する際に助けとなる」としている。（pp. 107-108）

このように、漢字とアルファベット（特に綴りレベルで比較した場合）は、同様に機能する場合がすくなからずあるが、１文字レベルで見た場合は、漢字の表音的・表意的要素の関係・構成上の特徴が目立つ。漢字の分析・その他の文字体系との比較を行う際にどのレベルに注目するかという点に留意する必要がある。

2. 表音的表記と漢字の表意性

本論文の第 1 節では、文字の分類へのアプローチとその中の漢字の位置づけについて述べてきたが、ほとんどの場合は「表意」「表音」の２柱が基準となっている。このような見解は文字論のみならず、文字・言語の研究に多いに影響を与えてきた。外国地名・人名などの音訳表記における漢字は「意味」とは関係なく「音」のみを表しているという見方もそうした結果の一つである[18]。

本節では、表音的表記における漢字の「表意性」がどのように研究され位置づけられてきたかを検討する。

2.1. 外来語の表記の研究

まず、外来語の研究に目を向けると、意味・イメージを顧慮した音訳が注目されている早期の先行研究として、矢口（1938）「明治以前に於ける外来語の音譯」があげられる。

---

[17] 森賀（2018）の＜単位＞＜要素＞の用語については注 15 を参照。

[18] 例えば、「国名を漢字で書く習慣は中国の影響で、単に音を表すものであり、漢字の意味とは全く関係がない」（『Reading Japanese financial newspapers: 新聞の経済面を読む』1991）、「音訳の研究は音韻学にしか資しない」（荒川清秀「外国地名の意訳 ―「剣橋」「牛津」「聖林」「桑港」」『文明』21, 2000）などがある。筆者は、外国地名・人名のような音訳表記の場合でも、漢字の表意的な要素の影響・関与が見られるケースが多々あることをシャルコ（2016、2020 等）において証明している。

矢口は、音訳の表記に「何らか内容と関係ある文字あるひはその事物の性質を暗示する文字」が用いられる場合があると既に指摘しており、そのような表記法を「縁字」と呼んでいる。(『外来語研究』第 4 巻, 2 号)

矢口（1938）では、個々の例に関する詳細な考察はなされていないが、江戸時代の「酷烈剌」（コレラ）や「切死丹」（キリスタン）から福沢諭吉の『世界國盡』の「武良尻」（ブラジリ）や「荒火屋」（アラビヤ）まで、表意性を帯びた音訳の例を豊かにあげられている。

近年の外来語表記の研究においては、表意と表音を兼ねた例に関する言及が見られる。Irwin (2011)は、日本語における外来語の漢字表記を次のように分類している。

Semantograms（表意表記）: 煙草（タバコ）、麦酒（ビール）、燐寸（マッチ）など；

Phonograms（表音表記）: 入万（イルマン）[19]、馬尻（バケツ）など；

両者のミックス : 伴天連（バテレン ※padre より）、吉利支丹（キリシタン）、倶楽部（クラブ）、型録（カタログ）など. （pp. 169-173）

今野（2009）は、「ハンカチ」を例として取り上げて、外来語の漢字表記を以下のようなグループに分けている。

表音的表記　仮名による・・・・ハンカチフ・ハンケチなど
　　漢字による・・・・半加知布
折衷的表記　半巾・半手巾
表意的表記　日本的　　手拭・汗手拭
　　中国的　　紛帨・手巾・汗巾・汗巾児・手帕（p. 30）

なお、この場合の「折衷的表記」は、外来語を表す際に一つの漢字が同時に音と意味を兼ねて用いられるという意味ではなく、語の一部は音訳、一部は意訳であることを指しているようである。すなわち、「剣橋（ケンブリッジ）」のような半意訳にあたるものであり、完全な音訳でありながら漢字の字義も考慮した（あるいは字義の影響を受けた）例とは異なる。逆に、今野が「表音的表記」として上げている「半加知布」は「フ」という音を表すのに「布」が選択されているには一定の表意性が見出すことが出来る。

2.2. 当て字の研究

当て字の研究においても、音訳が一つの用法としてみなされている。

例えば、『漢字百科大事典』では、当て字は以下のように分類されている。

1) 漢字音に基づくもの：外来語の表記（倶楽部 クラブ club、珈琲 コーヒー coffee、瓦斯 ガス gas など)、本来梵語に由来するもの（卒塔婆 そとば stupa、阿弥陀 あみだ Amitabha、娑婆 しゃば saha など)、夏目漱石の「馬尻 バケツ」など。
2) 漢字の訓に基づくもの：外来語には少ないが「型録 カタログ catalogue」がある。

[19] ポルトガル語の irmão（一般には「兄弟」、宗教的には「法兄弟」の意）より。一六～一七世紀の頃日本に渡来したキリスト教の宣教師の一階級。パードレ（バテレン）の下にある助修士。平修士。("イルマン", 日本国語大辞典, JapanKnowledge, https://japanknowledge-com.ez.wul.waseda.ac.jp 閲覧日 2021-07-27）

和語（目出度 めでたく）、（派手 はで）など。
3)　漢字の意味に依拠するもの：熟字訓（五月雨 さみだれ、雪崩 なだれ、土産 みやげ）
このように、大きく音訳（音・訓）と意訳に分けているが、意味と音を兼ねた例については触れていない。（p. 87）

それに対して、笹原（2010）は、当て字を用いる際に漢字のどの要素が利用されるかによって次のように分類を行っている。

表2　笹原（2010）による当て字の分類

利用される要素	例（一字）	例（二字以上）	表記法の名称
字音（発音）	汎（パン）	冗句（ジョーク）、倶楽部（クラブ）	音訳
字訓（発音）	鯖（サーバー）	矢鱈（やたら）、出鱈目（でたらめ）	音訳（訓訳）
字義（意味）	扉（ドア）、 瞳（め）	煙草（タバコ）	意訳（熟字訓も）
字体	弗（＄）	子孑　ぼうふら	形訳

※この表は、筆者が『当て字・当て読み 漢字表現辞典』の 895 頁における分類を表の形にまとめたものである。

上記のように、笹原（2010）は当て字による表記法を「音訳（音・訓）」「意訳」、「形訳」に分類している。音と表意的な要素を兼ねた用例に関しては、個別のグループを設けていないが、音訳と意訳が複合する場合があると指摘し、「型録（カタログ）」をそのような例としてあげている。「型録」の表記は「字訓「かた」と字音「ロク」を利用しており、同時に字義も意識された選択の跡が見えるものとなっている」と述べている。（『当て字・当て読み　漢字表現辞典』pp. 894-895）これまでにほとんど注目されてこなかった字体の類似による当て字（弗-＄）という用法を分類に加えている点も興味深い。

2.3.　万葉集の研究

ここまでは、外来語及び当て字の研究では表意性を帯びた音訳がどのように捉えられ位置づけられているのかについて見てきたが、万葉集の研究においても、このような表音表記における漢字の表意的な役割とその位置づけに関する考察が見られる。

周知の通り、万葉集の全歌は漢字のみによって記されており、その表記も漢字の用法によって、表音主体表記（音仮名主体表記）と表語主体表記（訓字主体表記）に分類されることが一般的である。しかし、「表語」と「表音」という概念で説明するには限界があるという見方もある[20]。例えば、Lurie（2011）は、「孤悲」という有名な例を万葉集表記の複雑性(complexity)の象徴として取り上げて、この文字用法は表音でありながら同時に表意でもある（simultaneously phonographic and logographic）と述べている。このような表記を可能にしたのは複数の選択肢の存在と漢字の多機能性（multiple functions）だと指摘している。（2011, p. 289）

尾山（2014）は、「萬葉集歌表記における「表意性」と「表語性」を巡る一試論」とい

[20] Lurie (2011), ルーリー (2013)。

う論文において、表音でありながら、ある付加的意味を読み取れる表記について「表意性」という用語を用いている。例として以下の歌における「念」という字の働きをあげている。

⑧　春日山　霞たなびき　心ぐく　照れる月夜に　獨鴨念（ひとりかもねむ）　（巻四・七三五）

「獨鴨念（ひとりかもねむ）」の用例は、表語文字「念」の表音用法であるわけだが、思って寝るといった付加的意味を読み取ることができる。これを本稿では、用法に従ってできあがった表記が何らかの性質を帯びていることから、「表意性」と呼ぶ。(p. 3)

さらに、川端（1975）は、字義を意識した仮名字母の使い方を次の三種類に分類する。

1)　全体としての文脈と有機的に関連する場合

例　＜前略＞旗須為寸（はたすすき）　四能乎押靡（しのをおしなべ）　草枕（くさまくら）　多日夜取世須（たびやどりせす）　古昔念而（いにしへおもひて）（巻一・四五）

解説では、「音仮名・訓仮名を交用した「多日夜取」はその特異な表記で安騎野の旅宿を語って」いると述べている。(p. 156)

2)　歌としての文脈の外に何らかの意味を作り出す場合

例　雨晴而（あめはれて）　清照有（きよくてりたる）　此月夜（このつくよ）　又更而（またさらにして）　雲勿田菜引（くもなたなびき）(巻八・一五六九)

例 2)における訓仮名の「田菜引」に関して、「その文字の関連において句、あるいは熟語としての意味のまとまりをなしているが、その意味は全体の文脈から遊離しつつ、言わば文字の限りでの意味的な結節をなしている」としている。(p. 157)

3)　文中の他の字（語）と連想的な関連をもつ場合

例　言云者（ことにいへば）　三々二田八酢四（みみにたやすし）　小九毛（すくなくも）　心中二（こころのうちに）　我念羽奈九二（わがおもはなくに）(巻十一・二五八一)

上記の例の場合は歌中の漢数字を「連想的な関連をもつ」ものとしてあげている。(p. 158)

2.4.　中国における音訳借用語と漢字の表意性

中国では、漢字を表音的に用いる例が古くから見られ、「卒塔婆」（そとば）、「阿弥陀」（あみだ）のような仏教用語への音訳や「突厥」（チュルク）、「蒙古」（モンゴル）のような周囲の民族名に対する音訳などがそれにあたる。現代においても、外国地名・人名やブランド名など、特に固有名詞の場合は音訳表記が頻繁に用いられるが、第 2 節でこれまで見てきた内容と同じように、表音的表記における表意性の位置づけが問題である。

例えば、Hansell (2003) は、こうした表意性を帯びた音訳表記を“Semanticised

loanwords/transcription”[21] と呼び、台湾における外国ブランド名を材料に、表意性のタイプと度合いによって下記の三つのパターンに分類している。

1) Coherently semanticised loanwords (CSL)

ソース言語での発音にマッチして、それぞれの漢字が表す意味も当該言語の文法に従って理解できるフレーズをなす。

例：倍耐力　Bèinàilì（タイヤのブランド）

力多精　Lì duō jīng（粉ミルクのブランド）[22]

2) Randomly semanticised loanwords (RSL)

このタイプの音訳借用語は、漢字の意味がブランドのイメージに関連している場合があれば、単に肯定的なコノテーションを表すのみの場合があって、当該言語の文法に従って理解できるフレーズにはならないのが特徴である。

Hansell は、RSL をさらに、fully semanticised（完全な表意性）と partially semanticised（部分的表意性）に区分している。Fully semanticised の場合は、語を成す全ての漢字が何らかの意味あるいはコノテーションを表す。Partially semanticised は、純粋な音訳と表意性のある表記が混ざっている。

a. Fully semanticised:

例　沛綠雅 Pèilǜyǎ（フランス産のミネラルウォーター）

喜美　Xǐměi　Civic（ホンダ産の乗用車）

b. Partially semanticised

例　雲斯頓 Yún sī dùn（タバコのブランド　Winston）

蜜絲佛陀 Mìsīfótuó（化粧品のブランド　Max Factor）[23]

3) Purely phonetic loanwords (PPL)

例　米其林 Mǐqílín Michelin（タイヤメーカー）

奥斯摩比 Àosīmóbǐ　Oldsmobile（自動車メーカー）

Hansell はさらに、ブランド名の表記を普通名詞と外国地名の表記と比較し、ブランド名の表記には Semanticised phonetic loans（表意性を帯びた音訳）が特に多く見られるのに対して、地名にはゼロに近いと断言している。また、音訳語をソース言語からの phonetic distance（ソース言語での発音への忠実度）によって分析し、特にブランド名の場合は漢字の選択の際に発音への忠実さよりも意味への考慮が優先されることが多いと指摘している[24]。（“Phonetic fidelity vs. suggestive semantics: variations in Chinese character choice in the writing of loanwords”, p. 286）

---

[21] Hansell (1989) “Non-logographic Chinese and the non-alphabetic alphabet”, p. 109.

[22] 日本の洗剤「マジックリン」の台湾名「魔術靈」やフランス産のミネラルウォーター「Perrier」の「巴黎水」という訳も CSL の例として挙げられる。

[23] なお、この場合の表意性は、書き手の意図は必ずしも読み手の認識と一致しない。例えば、たばこのブランド Winston について中国人の留学生に聞いてみたら、「「雲」から煙のイメージ沸いてこなかった」、「タバコのブランドだと知らなかった、アイスだと思っていた」などの返事が返ってきた。

[24] 日本における外国地名・人名の漢字表記は、訓読みの使用、仮名表記と漢字表記の選択肢など、文字体系の構成から言語政策まで、中国とは異なった条件のもとで表記の選択が行われてきた。

2.5. 意味を顧慮した音訳は漢字圏に限ったものではない

ここまで見てきたように、漢字の字義の顧慮（関与）が見られる音訳は、少なくとも近現代では漢字圏の独特な現象として考えられてきたが、Zuckermann の一連の研究では、その他の言語にも同様な例を見出すことが可能だとしており、多言語にわたった枠組みを提案している[25]。

Zuckermann（2003）は、このような音訳に対して Multisourced neologization (MSN)という用語を用いて、外来語の借用パターンの一つとして説明している。ヘブライ語やその他の言語から数多くの用例あげている。（下線は筆者による）

⑨ Multisourced neologism is a neologism that preserves both the meaning and the approximate sound of the parallel expression in Sl1 (Source language 1), using pre-existent TL (Target language) / SL2 (Source language 2) lexemes or roots.

MSN (マルチソース借用語)とは、ターゲット言語（または第 2 のソース言語）の既存の語彙素や語根を用いて、当該の単語のソース言語における意味と音を保った借用語のことである[26]。（“Language Contact and Lexical Enrichment in Israeli Hebrew”, 2003, p. 3, ※日本語訳は筆者による）

この MSN（マルチソース借用語）は、表意的な要素の有無（意味が反映されているかどうか）によって Phonetic matching（PM=音マッチング）と Phono-semantic matching（PSM=音・意味マッチング）に分けている。それぞれが、日本語でいう「音訳＝phonetic matching」と「音訳兼意訳＝phono-semantic matching」に対応していると思われる。

Zuckermann（2008）は、特に PSM（音・意味マッチング）に注目し、この借用方法が次のような言語において頻繁に見られるとしている。

1) 純化主義の言語、すなわち新しく入ってきた外来語が固有語に置き換えられる言語（例：アイスランド語、フィンランド語、ヘブライ語など）

2) 中国語や日本語のような、表音と表意の機能を兼ねた漢字を用いる言語。（Icelandic: Phonosemantic Matching, 2008, p. 44）

アイスランド語・ヘブライ語・中国語における PSM の共通の例として、英語の AIDS（エイズ）の音訳をあげている。英語での AIDS の意味は Acquired Immune Deficiency Syndrome（後天性免疫不全症候群）であるが、それはアイスランド語、中国語、ヘブライ語に次のように音訳された。

アイスランド語 eyðni（eyð=滅ぼす・破壊する, ni＝名詞化の働きを持つ語尾）

現代中国語　爱滋病 aizibing（愛が引き起こす病気）[27]

ヘブライ語　eyds（En Yoter Dfika Stam＝もう一夜限りの関係はおしまい）（2008, p. 37, f. 4, ※日本語訳は筆者による）

このように、それぞれの言語において AIDS の解釈・意味を反映させる方法が多少異な

[25] なお、漢字圏以外の言語の場合は、音訳でありながら意味への配慮が見られる用法は、一文字単位でではなくて、形態素・語のレベルで見られる点が漢字を使った例と異なる。

[26] 例えば、「型録」の場合は、ソース言語（SL）は英語で、ターゲット言語（TL）は日本語である。「型」と「録」という日本語（TL）の既存の語彙素を用いて、英語（SL）の「catalog」の音と意味を表そうとしている。日本語と英語、両言語の要素が関わっていることから「マルチソース」である。

[27] なお、「艾滋病」という音訳も用いられ、台湾では「爱死病」ともいう。

るといえども、原語に近い発音を保ちながら、語義に近いイメージを持たせるという点が共通している。

さらに、Zuckermann は PM（音マッチング）と PSM（音・意味マッチング）の中間として SPM（semanticized phonetic matching）をあげている。SPM は「表意性を帯びた音マッチング」のように訳せる。PSM（音・意味マッチング）との違いに関しては、はっきりとした境目がなく、音訳と音訳兼意訳の間を埋めるとしている。(p. 36) このように、Zuckremann は、音訳を「（純粋）音訳 PM」、「表意性のある音訳 SPM」と「音訳兼意訳 PSM」に分けている。

漢字圏における地名の音訳についても触れており、アメリカの「美国」を SPM（表意性のある音訳）としてあげている。この場合の表意性は、音訳の選択の基準は発音に忠実なだけでなく、「politically correct」の表記を選ぶことも重要であったためと述べている。

それに対して、ヘブライ語の文献で見かける「amá reká」（empty nation、空虚な国）という「アメリカ」を蔑視する音訳は、音訳兼意訳（PSM）の例としてあげている。漢字圏における同様な否定的な PSM の例として、「モンゴル」（蒙古＝暗い・愚か＋古い）と「チュルク」（突厥、突＝衝突）をあげている。（p. 62）

このように、Zuckermann は「美国」は「表意性のある音訳」であるのに対して、ヘブライ語の「amá reká」や「蒙古」・「突厥」は「音訳兼意訳」であるとしているが、こうした固有名詞の場合は「音訳兼意訳」という用語が適用可能かどうかという問題が浮上してくる。それについて次の節で詳しく触れたい。

2.6. 固有名詞と漢字の表意性

本節では表音表記における表意的な要素がどのように捉えられてきたのか見てきたが、ほとんどの用例は普通名詞であることが目立った。

万葉集の「念（寝）」「孤悲（恋）」や「倶楽部（クラブ）」「型録（カタログ）」や「爰滋病（AIDS）」などが、普通名詞であり、それぞれが意味を持ち特定の全般的なイメージと結びついている言葉である。万葉集の場合は、「念」「孤悲」のような特殊な表記を用いることによって、既存の意味（「寝る」「恋」）にさらなる情報を付加したものである。また、「倶楽部＝ともに楽しむ部」「型録＝型の記録」のように、それぞれの単語の意味の説明として働く表記である。

ところが、固有名詞の場合は、特に地名・人名の多くは普通名詞とは異なり、意味を表さないことが多い[28]。このような特徴があり、「音訳兼意訳」という用語は適用しにくい場合があると筆者は考える。例えば、前述のように、Zuckermann（2003）は「蒙古」を「PSM 音・意味マッチング」としてあげているが、「モンゴル」は本来民族名であって、この単語自体は「暗い・古い」といった意味とは無関係である。故に、この場合は、原語における音と意味をマッチングさせたよりも、原語での音と目標語でのイメージ（意

[28] 特に国名の場合は、「ロシア」「ドイツ」「モンゴル」のように民族名や「アメリカ」のようにその土地の発見者にちなむものが多い。「オーストラリア」のように、本来は「南の」という意味を表していた例があるが、その意味に対する意識が時間とともに薄れてしまい、一般的には響きのみが認識されるように至った。

図）のマッチングとして理解した方が適切であろう。

すなわち、固有名詞を表記する場合は、その語の表す本来の意味を参考にするより、その土地あるいは人物に対するイメージ・意識、表記の＋/ー印象といった要素が反映される場合が多い。

このようなこともあって、矢口（1938）は、「音兼意味」ではなく、「縁字」と呼んでおり、「何らか内容と関係ある文字あるひはその事物の性質を暗示する文字」とより広義な定義を行っている。尾山（2014）も「音兼意味」や「表意」を避けて、「表意性」という用語を用いる。本論文においても「表意性」という用語を採用している。

2.7. まとめ

このように、表音的表記における漢字には、その字義や形が何らかの形で反映（考慮）される場合があることが、万葉集の研究から近現代の外来語や当て字の研究においてまで指摘されている。しかし、このような文字用法に対する用語及びその定義が定められておらず、著者によって大きく揺れていることが明らかである。

矢口（1938）の「縁字」、今野（2009）の「表音/表意折衷的表記」、尾山（2014）「表意性」、Hansell(1989)の Semanticised loanwords/transcription のように特別な用語を用いる場合があれば、笹原（2010）や Irwin(2011)のように、特定の用語を設けず、「ミックス」や「複合」のようなことばで説明する場合がある。

本論文で挙げてきた研究領域は、「万葉集」と「現代中国語の音訳借用語」のように、一見で時期的にも対象的にも著しく異なるように見えるが、漢字は語を表す際にどのように働くのか、表記法の面で共通の問題を抱いていることがここまで見てきた内容から窺える。外来語の場合は「音訳・意訳」、当て字の場合は「発音と意味」または「音訳と意訳」、万葉集の場合は「表音主体表記と表語主体表記」という分類の方法が確定しており、とにかく「音」と「意味」とどちらが活用されているのかが基準になっている。第 1 節で見てきた文字類型研究における文字体系の分類と同様の問題である。

しかし、Hansell(2003)などの先行研究においても指摘されているように、このような分類方法には限界がある。特に表音的表記における漢字の表意性は、ほぼ空白のままであるといっても過言ではない。用語の揺れや個別分野での孤立的な扱いは、この問題が十分に意識されていないことを示していることも指摘できよう。

3. 5 つのレベルからなる日本語の漢字の分析モデル

本節では、1 節、2 節で論じてきた「表音」「表意」という 2 極式モデルの問題の解決、「表音的表記における表意性」の位置づけを目指し、日本語における漢字の分析モデルを提案する。

漢字について考察する際に複数のレベルを見出すことが可能であるという考えを基に、5 つのレベルからなるモデルを提案する。1「基本性質レベル」、2「言語単位レベル」、3「造字レベル」、4「運用レベル」、5「メタレベル」という 5 つのレベルを設け、各レベルでの漢字の分類・分析に関わる要素と具体例を記載する。本モデルの全体像は文末の表 3「5 つのレベルからなる日本語の漢字の分析モデル」にまとめた。

以下は、例をあげながら、それぞれのレベルについて解説する。

レベル１は文字の「基本性質」に関わる「**デフォルトレベル**」である。「デフォルト」という名の通り、漢字が辞書に掲載されているような、抽象化された状態を指す。本論文では、このレベルにおける漢字を「表語文字」として位置付ける。実際に、辞書を引けば、基本的に各漢字が何らかの字義をもっており、語・または形態素という意味を有する言語単位と結び付いている。

本論文の 1 節において述べたように、DeFrancis のように、全ての文字体系が表音的であるという見方もあるが、筆者は、1 文字レベルで比較した場合は「表語」「表音」の区別が有意義であるとする Handel、Sproat 等の立場に賛同し、基本性質のレベルでは漢字を「表語文字」と位置付ける。

例えば、「露」は「つゆ」「あらわ」などの語を表し、「つゆ、あらわす、うるおす」といった意味と結びついている。

レベル２は「言語単位レベル」とし、漢字が対応する言語単位によって「語」「形態素」「音節」「音素」という４つの要素に分けた。

例えば、「風」という漢字は、「かぜ」という語を表すとともに、「風船」という単語においては形態素として働き、「王風島」では「フ」という音節を表す。さらに、音素を表すことも可能であり、例えば、「美風愛」の人名では「F」を表記するのに用いられている。

レベル３は「造字レベル」であり、漢字が造字の段階でどのような方法でつくられたかによって、六書の造字法[29]を参考に、「形」「意味」「音（＋意味)」という３つのカテゴリーに分けた。

例えば、「露」は、意味領域を示す「雨（意符)」と発音を示す「路」（音符）の組み合わせによって出来上がった、六書の造字法名を借りれば「形声文字」であり、「音（＋意味)」というカテゴリーに分類できる。

造字の段階については、他の漢字の構成要素となった象形文字（山、馬）・指事文字（上、中）の成立と、それらを組み合わせて出来上がった数々の漢字の成立を区別する必要があるという指摘が古くから見られる。『説文解字』では既に漢字を「文」（要素に分割できないもの）と「字」（文と文を組み合わせて出来たもの）に分けている。森賀（2018）も、「漢字の＜要素＞の成立と＜単位＞の成立は、ラテン文字アルファベット 26 文字の成立とそれらを使った単語の綴りの成立が独立した別々の現象であるのと同じく、全く異なる二つの現象なのである。」としている。（p. 15）

本モデルでは、象形・指事を「形」というグループに分類し、会意文字と形声文字との差異を示した。

レベル４は「運用レベル」で、実際の使用における文字の機能・用法を指す。

漢字を用いて、実際に文章を書いたり読んだりした場合に、「形」「意味」「音」の内にどの要素が活用されるかによって、「表形象的」「表意的」「表音的」という３つの機能への区分である。

例えば、「露台（バルコニー)」における「露」はその読み（音）とは関係なく、「露」

[29] 六書とは、漢字の構成法ならびに転用法を六種に分けて説明したもの。すなわち、象形・指事・会意・形声・転注・仮借をいう。『説文解字』（西暦 100 年頃成立）の叙にある記事が具体的説明の最古例とされる。

の「あらわ」という字義（意味）を活かした、極めて表意的な使い方である。一方、「露西亜」における「露」は、逆にその字義を後退させ、「ロシア」の「ロ」という表音的な機能を果たしている。

レベル５は「メタレベル」と呼び、文字の基本性質や運用法とは関係なく、文字・表記へのイメージに関わるレベルである。意味・読み（＝伝達内容）が変わらなくても、文字種・字体の選択や使用文脈といった要素によって、文字（列）が特定のイメージと結びつき、一定の表意性を帯びる場合をいう。

記号論の領域において、本論文でいうメタレベルは、「実用的機能」に対する「美的機能」として位置づけられることがある。

池上（1984）は「実用的機能」の場合は、「われわれの注目はことばの彼方にある伝達内容に向けられる。ことばは、それを伝える手段にすぎない」と説明している。それに対して、「美的機能」はその内容の表現方法に着目するとして、「自分の名前が略字で書かれたり、ダイレクト・メールなどで仮名書きにされるの」を嫌うことを例に、次のように述べている。

⑩（名前の表記の例は）「情報伝達、つまり、何を表わしているか、ということからすればどれでも「等価」のはずであるが、自分の名前に特別な愛着を持つ人にとっては、いかに表わすかということも、どうでもよいことではないのである。」（『記号論への招待』p. 21, 引用の前のかっこは筆者による）

本モデルで扱うメタレベルも、文字をもって「何を表す」ではなく、「誰が・いかに表す」のが重要である。以下にメタレベルに関わる要素について説明する。

メタレベルに関わる要素は、「**内的要素**」と「**外的要素**」に分類した。

内的要素は、文字（列）そのものに関わる要素で、漢字・ひらがな・ローマ字といった文字種の選択や字体・書体などである。内的要素をさらに「表記的要素」と「書記的要素」に分けられる。

「表記」と「書記」の区別に関しては、矢田（2012）は「書記」が「書かれたもの外形的総体」とし、尾山（2017）も同様な定義を行っている。

⑪　書記とは書かれた文字（列）というその結果にまつわって、具体的に付随する事象すべてを含み込むものとする—それはすなわち、字形、書体、文字の太さ細さ、文字の大小、連綿か否か、墨継ぎ、改行等紙面上の配置などをも含めた、その総体を指す。（p.39）

それに対して、「表記」は、「そういった書記が必然的に内包する、筆致等に関わる種々の要素をいずれも捨象して抽出される、抽象度の高い文字列を指す。」（p. 39）

本論文では、尾山・矢田の「表記」と「書記」の区別を基に、メタレベルに関わる内的要素を「表記的要素」と「書記的要素」に分けた。

「表記的要素」として、文字種（漢字・かな・ローマ字など）、字体（新字体、旧字体、異体字）、同音異字の場合は特定の文字の選定などが挙げられる。

「書記的要素」は、字形、書体、文字の太さ・細さ、文字の大小、画数などである[30]。

外的要素は、文字（列）そのものではなく、文字（列）が使われる「文脈・背景に関わる要素」とする。

文字について考察する際に文字（列）そのものに関わる、すなわち言語学的な要素が分析対象になるのが一般的で、外的要素が軽視されがちな傾向がある。しかし、筆者は、文字（列）に対するイメージは、文字（列）そのもののみならず、その文字（列）が用いられる文脈や歴史的・社会的背景まで大きく影響する場合があると考え、「外的要素」をメタレベルにおける分析基準に加えた。

「文脈・背景に関わる要素」は、文字（列）が使われるメディア、書き手の意図の有無、社会・歴史的背景などを含む。

以下に「露」という漢字を持ち出して、メタレベルにおける分析の例をいくつかあげる。下記にあげる全ての例では、「露」は「ro」という音を表しており、運用レベルでは表音的に機能しているが、メタレベルでは一定の表意性が見出せる。

・ 現代のマスメディアにおけるロシア国名の略称「露」「ロ」の使い分け。

内的要素：文字種の選択（漢字 vs カナ）によってイメージが変わる →「露」は「日露戦争」など帝政ロシアのイメージが強いため、ソ連崩壊後の新しいロシアは「ロ」で表記。

外的要素：各メディアの政治的な立場なども表記選択に影響を与えることもあるようだ。保守的の産経新聞は「露」、左寄りの朝日新聞は「ロ」。

・ 「日魯漁業」は、「日魯」を縦に書くと、「毎日毎日魚がとれる」という縁起良い解釈ができるため、「日露」より「日魯」が優先となった。

内的要素：漢字列の方向（書記的要素）。「形」にもとづいた漢字の表意的な分析（表記的要素）[31]。

外的要素：漁業の企業名として「魚」を含む表記が優先であったなどがあげられる。

・ 日露戦争中の「日露」（日が昇る、露は消える）。

内的要素：「露」の「はかない」というコノテーションの強調、文字の並び順（日→露、日が昇る→露は消える）。

外的要素：日露戦争中の敵対関係。

・ 「夜露死苦」における「露」は「はなかい命」のコノテーションが感じ取れる。

内的要素：「よろしく」を「夜　露　死　苦」という漢字の選択。

外的要素：暴走族によって使われる表記。

---

[30] なお、書記的要素でも表記レベルまで影響してくる場合がある。例えば、笹原宏之教授が授業で行った実験では、「まっちゃいろ」という単語は文字の色が語の特定に影響するということが分かった（緑の場合は「抹茶色」、茶色の場合は「真っ茶色」）。また、欧米諸言語に目を向けると、英語の「China」と「china」などのように、文字の大小によって意味の区別がつく例も少なくない。

[31] 共通例として「明日」があげられる。「日が沈んで、月が出て、また日が出たら明日だ」のように、熟語における漢字の配置と構成要素に基づいた解釈である。

表 3　5 つのレベルからなる日本語の漢字の分析モデル

<table>
<tr><th>レベル/層</th><th colspan="6">漢字の分析に関わる要素</th></tr>
<tr><td>1. デフォルトレベル
文字の基本性質に関わる</td><td colspan="6">表語</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2.　言語単位レベル
表記可能な言語単位に関わる</td><td>語</td><td colspan="2">形態素</td><td>音節</td><td colspan="2">音素</td></tr>
<tr><td>風</td><td colspan="2">風船</td><td>王風島（オアフ島、風＝フ）</td><td colspan="2">美風愛（Mifa、風＝f）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">3. 造字レベル
成り立ち、由来に関わる</td><td colspan="2">形</td><td colspan="2">意味</td><td colspan="2">音（＋意味）</td></tr>
<tr><td colspan="2">象形・指事：山、雨、上、中</td><td colspan="2">会意：林、各、躾</td><td colspan="2">形声：露（雨＋路）、路（足＋各）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">4. 運用レベル
実際の使用における文字の
機能・使われ方に関わる</td><td colspan="2">表形象的機能
形の類似による当て字：弗　ドル
分字：只（ロハ）、ギャル文字
顔文字：（ `皿´)o、(#`益´)凸、囧 rz
漢字の形を元にした表現：大の字/川の字
数える時に使われる「正」</td><td colspan="2">表意的機能
漢文訓読とそれに関連した用法
熟字訓：明日（あす）、大人（おとな）など
意味による当て字：煙草（たばこ）、露台（バルコニー）
衝突をさけるための区別：山女魚（ヤマメ）[1]</td><td colspan="2" rowspan="2">表音的機能
仮借：来、豆、直音：仏　音物、反切：陳 直珍切
****
万葉仮名：卑弥呼（ひみこ）、八間跡（やまと）、夏樫（なつかし）
和語への当て字：素敵、出鱈目、兎に角、夜露死苦
外来語の音訳：切支丹、露西亜、浦潮斯徳、倶楽部</td></tr>
<tr><td colspan="4">名前などの漢字を口頭で説明する場合：「嶋・島・縞」や「高・髙」など
当て読み：「海の中に母がいる」</td></tr>
<tr><td rowspan="3">5. メタレベル
文字に対するイメージに関わる</td><td colspan="6">表意性</td></tr>
<tr><td rowspan="2">内的要素</td><td>表記的要素</td><td colspan="4">文字種：　日露・日ロ、コーヒー・珈琲・Coffee
同音異字：　露西亜・魯西亜、ウヰスキー・ウイスキー
字体：　竜・龍、気・氣</td></tr>
<tr><td>書記的要素</td><td colspan="4">字形：鉄道会社名の鉄・鋲など
書体、文字の太さ・細さ：そば屋などの和食レストランの看板の崩し字、書体や PC のフォントによる印象の差
文字の大小など：「国法乎過犯事無久」などの宣命書き[2]、一部の中高生が使う因囚（「大人」より小さく見えてかわいい）</td></tr>
<tr><td>外的要素</td><td>文脈・背景に関わる要素</td><td colspan="4">文字（列）が使われるメディア：メディアによるロシアの略称の使い分け「露・ロ」
書き手の意図の有無：「日魯漁業」（ロシアの漢字略称として既に「露」が定着していたのに、「魯」を選択）
「樺太」（「唐太」という表記が 200 年近く使われていたのに、意図的に「樺太」に改めた）
社会・歴史的背：「唐太→樺太」（カラフト）、「蒙古→モンゴル」、日露戦争中の「日露」（日が昇る、露は消える）。</td></tr>
</table>

[1] アケビという植物名も「山女」と書かれる場合があるが、それと区別できるためか、魚を指す「山女」は「山女魚」と「魚」の一文字を足して表記される場合がある。
[2] 宣命書きとは、宣命・祝詞を中心に奈良時代から平安初期にかけて用いられた国語表記法の一。「国法乎過犯事無久」のように、ほぼ国語の語序に従い漢字だけで書かれ、体言や用言の語幹の類は大字で、用言の語尾・助動詞・助詞の類は小字で書き分ける。（大辞林）

参考文献

犬飼隆『文字・表記探求法』朝倉書店, 2002.

池上嘉彦『記号論への招待』岩波新書, 1984.

尾山慎「萬葉集歌表記における「表意性」と「表語性」を巡る一試論」『叙説』41 号, 2014, pp. 1-23.

――「『土佐日記』の「書記論」および「表記論」と、これから」『奈良女子大学文学部研究教育年報』14 号, 2017.

カイザー シュテファン（1995）「世界の文字・中国の文字・日本の文字　漢字の位置付け再考」『世界の日本語教育：日本語教育論集』5, 国際交流基金, pp. 155-167.

樺島忠夫『日本の文字：表記体系を考える』岩波書店, 1979.

川端善明「万葉仮名の成立と展相」『日本古代文化の探究・文字』上田正昭編, 社会思想社, 1975, pp. 123-184.

河野六郎『文字論・雑纂』河野六郎著作集 第 3 巻, 平凡社, 1980.

――『文字論』三省堂, 1994.

今野真二「handkerchief をどう書くか―外来語の漢字表記をめぐって」『清泉女子大学紀要』清泉女子大学, 2009.

笹原宏之『当て字・当て読み　漢字表現辞典』三省堂, 2010.

――『日本人と漢字』集英社, 2015.

佐藤喜代治編『漢字百科大事典』明治書院, 1996.

シャルコ・アンナ「現代における漢字とラテン文字の機能に関する一考察　―日本と欧米の一般社会における文字・表記を中心に―」早稲田大学大学院社会科学研究科, 2014.

――「音訳地名の表記における漢字の表意性 ―ロシアの国名漢字表記を例として―」『早稲田日本語研究』第 25 号, 2016, pp. 29-42.

――「日本における『ウラジオストク』の漢字表記」『論究日本近代語研究 1 』勉誠出版, 2020, pp. 143-158.

森賀一恵「漢字の本質」漢検研究奨励賞 最優秀論文, 2018.

https://www.kanken.or.jp/project/data/investigation_incentive_award_2006_moriga.pdf

矢口茂雄「明治以前に於ける外来語の音譯」『外来語の研究』第 4 巻、2 号, 1938.

矢田勉『国語文字・表記史の研究』汲古書院, 2012.

ルーリー・デヴィッド『世界の文字史と「万葉集」』青山学院大学文学部日本文学科編、東京：笠間書院, 2013.

Bloomfield, Leonard. *Language*. New York: H. Holt and company, 1933.

Coulmas, Florian. *The Writing Systems of the World*. Cambridge, MA: Basil Blackwell, 1989.

―― *Writing Systems: An Introduction to Their Linguistic Analysis*. Canbridge UP, 1996.

Daniels, Peter T. & Bright, William. *The World's Writing Systems*. New York: Oxford University Press, 1996.

DeFrancis, John. *The Chinese language: fact and fantasy*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1984.

―― *Visible Speech: The Diverse Oneness of Writing Systems*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1989.

—— "The Ideographic Myth". In *Difficult Characters: Interdisciplinary Studies of Chinese and Japanese Writing*, ed. Mary S. Erbaugh. Columbus, Ohio, pp. 1-20, 2002.

Diringer, D. *The alphabet: a key to the history of mankind*. London: Hutchinson, 1962.

Gelb, I. *A study of writing: the foundations of grammatology*. London: Routledge & Kegan Paul, 1952.

Haas, W. "Writing: the Basic Options". In *Writing Without Letters*, ed. William Haas. Manchester UP, pp. 131-208, 1976.

—— "Determining the Level of a Script". In *Writing in Focus*, ed. Florian Coulmas and Konrad Ehlich. New York: Mouton, pp. 15-29, 1983.

Hansell, Mark. "Non-Logographic Chinese and the Non-Alphabetic Alphabet". *In Proceedings of the Fifteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp. 102-113, 1989.

—— "Functional answers to structural problems in thinking about writing". In *Difficult Characters: Interdisciplinary Studies of Chinese and Japanese Writing*, ed. Mary S. Erbaugh. Columbus, Ohio, pp. 124-176, 2002.

—— "Phonetic fidelity vs. suggestive semantics: variations in Chinese character choice in the writing of loan words". In *Language variation*. Canberra: Pacific Linguistics, pp. 277-290, 2003.

Harris, Roy. *Signs of writing*. London: Routledge. 1995.

Handel, Zev. "Logography and the classification of writing systems: a response to Unger". In *Scripta*, 7, pp. 109-150, 2015.

Irwin M. *Loanwords in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins Pub. Co., 2011.

Joyce, Terry & Borgwaldt, Susanne R. *Typology of Writing Systems*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Pub. Co. 2013.

Lurie, D. B. *Realms of literacy: early Japan and the history of writing*. Cambridge, Mass.: Harvard University Asia Center; Distributed by Harvard University Press, 2011.

—— "Language, writing, and disciplinarity in the Critique of the "Ideographic Myth": Some proleptical remarks". In *Language & Communication*, 26, pp. 250-269, 2006.

Lyons, John. *Language and Linguistics: an introduction*. Cambridge: Cambridge University Press, 1981.

Mémoires concernant l'histoire, les sciences, les arts, les moeurs, les usages, &c des Chinois, par les missionaries de Pekin, Paris, 1776.

Rogers H. *Writing systems: a linguistic approach*. Malden, MA: Blackwell Pub., 2005.

Sproat R. A. *Computational Theory of Writing Systems*. Cambridge, UK; New York, NY: Cambridge University Press, 2000.

Taylor, Isaac. *The History of the Alphabet: an account of the origin and development of letters*. London: Edward Arnold, 1899.

Unger, J. Marshall. "The Very Idea: The Notion of Ideogram in China and Japan". *Monumenta Nipponica*. 45(4), pp. 391-411, 1990.

Zuckermann, Ghil'ad. *Language Contact and Lexical Enrichment in Israeli Hebrew*. Palgrave Macmillan, 2003.

—— "Cultural Hybridity: Multisourced Neologozation in "Reinvented" Languages and in Languages with "Phono-Logographic" Script". In *Languages in Contrast*. 4(2), pp. 281-318, 2004.

Zuckermann, Ghil'ad & Sapir, Yair. "Icelandic: Phonosemantic Matching". In *Globally Speaking: Motives for Adopting English Vocabulary in Other Languages*. Clevedon-Buffalo-Toronto: Multilingual Matters, pp. 19-43 (Chapter 2), 2008.